

小学校音楽科における金管楽器の音色と音の出るしくみを題材とした授業実践の試み

A practical research for making sounds of brass instruments in music education at elementary school

松 本 進乃助*
Shinnosuke MATSUMOTO

藤 井 浩 基**
Koki FUJII

要 旨

本研究は、小学校第3学年の音楽科における鑑賞の学習として、金管楽器を題材に取り上げた授業実践に基づくものである。〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素として「音色」に着目し、金管楽器の音の出るしくみについて児童が体験する活動を糸口に、金管楽器の音色のよさや美しさを味わって聴く学習の試案を提示した。これは、著者（松本）が島根大学教育学部の1000時間体験の一環として松江市立内中原小学校において4年間にわたり行なってきた金管バンド指導の経験をもとに着想し、島根大学大学院教育学研究科の「学校教育実践研究」として島根大学教育学部附属小学校で音楽科の題材化を試みたものである。

キーワード 金管楽器, 音色, 〔共通事項〕, 鑑賞, 音の出るしくみ

I はじめに

本稿は、小学校音楽科における鑑賞の学習に関わり、金管楽器の音色と音の出るしくみに焦点を絞って行なった教材開発と授業実践をもとに、その学習や指導法の在り方と可能性を考察したものである。

松本は、島根大学教育学部でトランペットを専攻した。その間、金管楽器専攻生有志と金管五重奏のグループを編成し、島根県内の様々な小学校、中学校に音楽鑑賞教室に赴き、児童、生徒に金管楽器の紹介をしてきた。そうした経験のなかで、金管楽器の「音の出るしくみ」というものが、児童・生徒にあまり理解されていないことを認識した。音楽鑑賞教室を重ねるうちに、児童・生徒が金管楽器について学習する際に、金管楽器の音や種類を知るだけでなく、金管楽器の音の出るしくみを知り、楽器の演奏を体験することで金管楽器の聴き方や見方が変わってくることがわかった。

また、松本は、松江市立内中原小学校で4年間にわたって、課外活動のひとつである金管バンドの演奏指導を行なってきた。これは島根大学教育学部の「1000時間体験」の一環として行なってきたもので、地域の学校に出向き、専門性を生かして児童の課外活動の支援を行なうと

*島根大学大学院教育学研究科

**島根大学教育学部芸術表現教育講座

いう趣旨によるものである。同校の金管バンドは、トランペット、アルトホルン、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバとパーカッションで構成されており、希望者40名程度が所属している。複数の金管楽器の指導を並行して行なうなかで、金管楽器の音の出るしくみ及び奏法が基本的に同じであることに着目し、それぞれの楽器の音色の特徴に気づき、味わいながら、アンサンブルを行なうことが、児童にとって重要であることを認識した。

このような2つの経験を生かして、島根大学大学院教育学研究科の「教育実践研究」では、島根大学教育学部附属小学校における音楽科の授業において、金管楽器の音色と音の出るしくみを題材化した授業実践を試みた。本稿での松本の執筆担当箇所は、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳである。

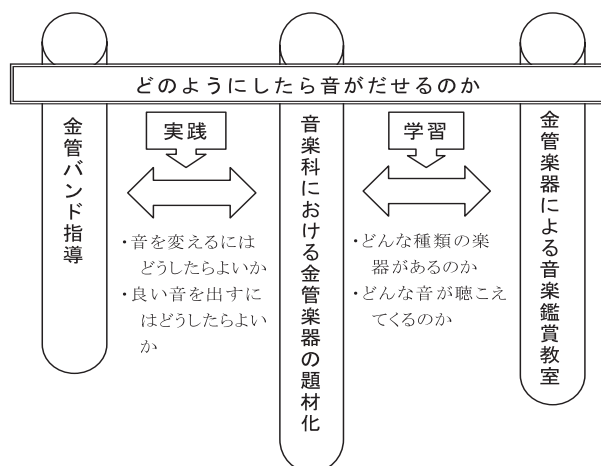
藤井は拙稿で、教師の専門性を生かした教材研究の在り方について、ライフワークとしての教材研究のテーマを、学部における研究や実践活動、また、大学院の修士論文のテーマに求めることを提言してきた（藤井 2010）。また、音楽科教育担当者として、改訂・学習指導要領における〔共通事項〕の取り上げ方や鑑賞における評価の観点について、事例研究を行なっている。ここでは、共同研究者及び指導教員の立場から、松本の授業実践に随時助言を行なうとともに、本研究の意義と課題について考察した。藤井の執筆担当箇所は、Ⅰ、Ⅴである。

Ⅱ 小学校において金管楽器に接する機会

小学校において、児童が金管楽器に接する機会として、金管バンドがある。上述のように、松本は、松江市立内中原小学校で金管バンドクラブの指導をしてきたが、金管楽器のアンサンブルに取り組む児童・生徒に接しながら、金管楽器の効果的な指導法に関心をはらってきた。また、大学や地域の方と金管アンサンブルを組んで、県内各地の小学校へ音楽鑑賞教室に赴くなかで、その都度、金管楽器の音色のよさや音の出るしくみを伝える方法を模索してきた。

島根大学音楽教育専攻でおこなう音楽鑑賞教室では楽器紹介をすることが恒例となっている。ここでは、楽器の名前を知っていたり、楽器の音を聴いたことがあったりするなど、児童によって経験や知識は、さまざまであるが、概ね、教科書にあるような楽器の情報について知っている場合が多い。ただ、「楽器の音の出るしくみ」となるとすぐに正解が出ることは少ない。金管バンドに所属している児童でさえも言葉で説明するとなると思い浮かんでこないことがある。すなわち、児童のほとんどが音の出る原理については知らないといっていよい。

このような活動を基盤に、この度、音楽科の授業において、金管楽器を題材化する試みに至った。松本のこれまでの活動、問題意識と、本研究の関係性は、次のように図式化できる。



本研究は、児童が金管楽器のしくみや構造の学習を通して、音色について、より具体的なイメージをもつための教材開発をめざすものである。小学校音楽科の学習における金管楽器は、演奏して表現の技能を養うためではなく、鑑賞において取り扱われるべきものとする。しかし、鑑賞は音を聴くだけではなく、体を動かしたり、空気を感じたりすることで、児童にとって、より主体的な活動に発展させることが可能である。

そこで、本研究では、金管楽器を特徴付ける要素として、〔共通事項〕にも含まれる「音色」とそれを裏付ける「音の出るしくみ」に注目した。

実際に楽器を吹いてみたり、児童の自発的な質問に教師が実演を伴って応えたりして授業を進めることとした。そして、唇や体の振動というようなフィジカルな感覚をもって、主体的に鑑賞に取り組むことができるように工夫した。

Ⅲ 小学校音楽科における「金管楽器」の学習

1. 小学校音楽科における「金管楽器」の学習の位置付けについて

小学校の音楽科において、「金管楽器」を題材として取り上げる場合、2008年改訂の学習指導要領では第3学年及び第4学年のB鑑賞の領域の以下の部分が該当する。

「楽器や人の声による演奏表現の違いを感じ取りやすい、独奏、重奏、独唱、重唱を含めたいろいろな演奏形態による楽曲」（文部科学省 2008：90）

この部分の事項の解説には以下のように示してある。

「児童がいろいろな演奏形態に親しみ、楽器の音や人の声の特徴及び演奏の魅力を感じ取れるような教材を選択するための観点である。具体的には、管楽器、弦楽器、打楽器などの楽器による独奏曲や重奏曲、独唱曲や重唱曲など、演奏への興味をもたせることができる楽曲を教材として選択することが大切である。」（文部科学省 2008：48）

学習指導要領解説には「管楽器」とは示されているが、「金管楽器」と具体的に示されているわけではない。しかし、教科書では、3学年もしくは4学年で取り扱われている。教科書には、主にトランペット、トロンボーン、フレンチホルン、チューバの4種類の金管楽器が紹介されており、楽器の写真とその代表曲が組み合わせて紹介されていたり、同じ楽器で雰囲気の違いを聞き比べさせたりするなど、鑑賞の教材として扱われている。また、2011年度から使用予定の教育芸術社の教科書には、金管楽器の「音の出るしくみ」についても記述されている（小原ほか 2011：66 - 67）。

金管楽器による教材曲を鑑賞する場合、教師や学校によって様々であるが、録音・映像資料を視聴して学習するというスタイルが多いように見受けられる。また、芸術鑑賞会や音楽鑑賞教室などで演奏される機会を利用して、金管楽器の学習につなげている授業もある（例えば、河添 2003）。

しかし、実際に金管楽器そのものを用いて、授業をおこなっている事例は少ない。その理由

に、楽器の問題がある。金管バンドクラブがあるような学校であれば、多少、数が少なくても楽器を用意することは可能であるが、必ずしも金管楽器がそろっている学校ばかりではない。次に挙げられる問題として、教師の金管楽器に対する意識の問題がある。この問題について、竹内（2006）は次のように指摘する。

「管・打楽器活動は特別な児童・生徒たちのための特別な活動ではないはずであるし、そうであってはならない。しかし、多くの場合、学校教育における管・打楽器活動は、やや特別視された存在となっているようである。」（竹内 2006：105）

こういった意識には、教師の経験が大いに関係していると思われる。金管楽器を専攻したり、吹奏楽やオーケストラで金管楽器を担当したりしてきた教師であれば、その経験を活かし、実演も可能である。しかし、そうでない場合は、金管楽器を体験させるときの手本となる水準のスキルを身につけなければ、授業では扱いにくい。それは他の楽器でも同様なことがいえるが、いずれにしても、音楽科の授業において、金管楽器が扱われにくいという現状は否定できない。

2. 小学校音楽科における金管楽器の題材化の意義

金管楽器は、鑑賞教材として可能性の大きい楽器である。松本は、授業における題材化のきっかけを、上述した金管バンドの指導経験から見出した。松江市立内中原小学校での金管バンド指導では、児童に対して、合奏指導や演奏技術指導を中心に行ってきた。本研究に関する「音の出るしくみ」は、特に新入部員への技術指導の場面で教えることが多かった。

同校では、新入部員はどんな楽器でも、必ず、はじめにマウスピースでのバズィング練習をおこなっている。児童は、マウスピースのバズィングができるようになるまでは、楽器にマウスピースをつける機会は少ない。それは、児童が音を出すときに「唇が振動して音が鳴っている」ということを知っていることが、今後の児童の日々の練習に関わってくるからである。金管楽器の演奏において「唇の無理なプレス」や「非効率的な振動（息漏れ等）」は、演奏上の問題として扱われており、児童によくある演奏の支障でもある。このような問題は、無理な唇の振動で音質を悪くしたり、音程のコントロールを困難にする原因になる。松本は、こうした問題を回避するために児童に「良い振動」が「良い音」をつくるということに、特に留意して指導してきた。新入部員は、多い時で10人以上になるが、ここでバズィングを示すと児童の理解は非常に速い。児童は説明を聞くよりも、実演を見て真似することのほうが、はるかにのみこみが早いため、多くの人数に一度で方法を示すときに有効な手段としてバズィングを実践してきた。しかし、金管バンドでは、体験することはあっても、言葉で表したり、説明したりすることは多くはなく、学習のための方法よりも指導のための方法として活用してきた。

本研究では、こうした指導経験の中での児童の気づきや演奏技術の向上に基づいた体験活動を取り入れ、題材としている。そして、金管バンドの指導にはない新たな視点として、体験で感じたことを言葉で説明することを授業の主な内容として取り扱うことができた。

ここで先行研究から、小学校の音楽の授業において金管楽器を取り入れた活動の意義について、跡づけてみたい。竹内；平田（2007）は、次のように述べている。

「小学校における授業内管の活動は極めて教育的意義が高いといえる。その理由は次の４点に集約できると考えている。

- ① ほとんどの児童が同時に学習をスタートすることができる
- ② 楽器演奏に対する児童の意欲を高めることができる
- ③ 楽器選択の幅が広く、それにより児童の好みや能力に合った楽器を選択できる
- ④ 金管楽器のすべてがほぼ同一の奏法で演奏できるため、指導がし易い」(竹内；平田 2007：161 - 162)

また、吉田（2008）は、管楽器として特に金管楽器を取り上げる意義を「木管楽器」と比較して、次のように述べている。

「『木管楽器』ではなく『金管楽器』を取り入れる理由

- ① いくつかの種類があっても奏法は同じなので指導しやすく、児童にとっては自分にあった楽器を自由に選ぶことができる。
- ② 表現力豊かな楽器であり、合奏するとダイナミックで豊かなハーモニーに浸ることができる。」(吉田 2008)

２つの先行研究に共通している視点は、「奏法が同じである」ということである。つまり、「音の出るしくみ」について学ぶことは金管楽器を体験するうえで欠かせないことであると言える。

こういった指導例として金管楽器があげられる所以は、下記に示すような金管楽器の特徴に依拠していると考えられる。

- ・それぞれ形にはっきりとした特徴がある（トロンボーンのスライド、ホルンの管の巻き、トランペットとテューバの大きさの違い等）
- ・形に伴って、音色や音の高低が変わっている
- ・児童の興味・関心をもたせやすい
- ・音色の違いがわかりやすい
- ・楽器の種類の多さから児童のお気に入りの選択肢が多い

金管楽器は視覚的にも聴覚的にもその違いがはっきりしており、さらにわかりやすさや知名度から児童も興味をもって取り組める。また、指導例にもあげられるように〔共通事項〕を有効に活用するためにもこういった特徴は、器楽の学習をより深く、わかりやすくおこなうために非常に有効であり、授業の教材としても教育的意義の高いものであるといえる。

3. 〔共通事項〕と小学校音楽科における金管楽器の学習

改訂・学習指導要領で新たに示された〔共通事項〕は、音色、リズム、旋律などの音楽を形づくっている要素に関する指導内容として、表現及び鑑賞の両領域の能力を育成する上で、共通に必要とされているものである。これからの学習指導では、この〔共通事項〕を学習の支え

としながら、鑑賞の領域では、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考えて、味わって聴くことができるようにすることが求められている（津田 2010：23）。

本研究では、〔共通事項〕のうち、事項アの「音楽を形づくっている要素」から、特に「音色」に着目した。音楽科の評価の観点のひとつである「鑑賞の能力」では、「音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考え、味わって聴いている」という趣旨が示されている。

また、国立教育政策研究所教育課程研究センターが2002年2月に発行した『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校）』では、3・4学年の「鑑賞の能力」の評価規準の具体例として、「個々の楽器あるいは同じ仲間の楽器の音色や人の声の特徴を感じ取って聴く」と示されていた（国立教育政策研究所教育課程研究センター 2002：10）。〔共通事項〕が新設される前ではあるが、授業の着想を得る上では、参考にしてよいと思われる。

Ⅲ－2でふれたように、金管楽器は奏法や発音のしくみは基本的に同じで、いわゆる「同じ仲間」でありながら、楽器の種類、大小、形態、構造等によって、音色が変わり、かつその違いがわかりやすいことが、教材としての特徴のひとつである。

このような特徴を生かして、最近、〔共通事項〕の「音色」に着目し、金管楽器を用いたすぐれた実践事例が紹介されるようになってきている。

最も新しいところでは、国立教育政策研究所が公開した「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」に金管楽器を用いた授業事例が含まれている。「感じ取ったことを絵やデザインなどで表し、感受の根拠を言葉で伝え合う事例」として、「いろいろ音の色～金管楽器の音色～」という題材名で、〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素のうち「音色」に焦点を絞ったものである。ここでは、トランペットとテューバ、ホルンやトロンボーンといった大きさやかたちが異なる2つの楽器を比較して、言語活動と関連付けようと試みられている。

DVD『小学校音楽鑑賞実践指導事例集 3年生用』でも、金管楽器の映像による鑑賞を学習に応用している指導例として、2つの実践が紹介されている。石井ゆきこの実践では、「トランペット吹きの休日」でメロディーラインを図式化して、その図をもとに模擬演奏をおこなっているところが特徴的であった。米原大司の実践では、楽器の音色に注目してどんな楽器が使われているのかを考えさせることを中心とした授業を展開していた。2つの事例とも、〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素としては、「音の重なり」と「音色」がおもに取り上げられている。

Ⅳ 「金管楽器」を題材とした授業実践

日 時：〔3年2組〕平成22年12月10日（金）5校時，12月17日（金）5校時
〔3年1組〕平成22年12月13日（月）1校時，12月16日（木）5校時
〔合 同〕平成22年12月17日（金）5校時

題 材 名：「金かんがっきのひみつ」

目 標：金管楽器の仕組みに関心をもたせ、金管楽器の音色を感じ取ることのできる能力を養うこと

対象学級：島根大学教育学部附属小学校 3 年 1 組， 3 年 2 組
場 所：附属小学校音楽室（1 時間目・2 時間目），集会室（3 時間目）
授 業 者：松本 進乃助（全時間），島根大学金管五重奏団（3 時間目のみ）
附属小学校指導教員：神門洋子教諭

1. 学級について

本研究は島根大学教育学部附属小学校 3 年 1 組を対象におこなった。学校には金管バンドクラブはなく，文化系のクラブは，合唱と造形の 2 つがある。学校にある金管楽器は，トランペットとトロンボーンが各一本ずつある。児童は，3 年生が年に一度，島根大学教育学部音楽教育専攻生のおこなう金管アンサンブルによる音楽鑑賞教室で金管楽器に触れる機会がある。しかし，それ以外ではなかなか金管楽器を間近に見る機会も少ない。そのため，金管楽器に関する知識や経験が少なく，児童全員が同じスタートラインからはじめることができる。

学級は男子 15 名，女子 15 名の計 30 名で構成されている。授業の中では，元気に活動したり，積極的に挙手したり，と明るく活気のあるクラスである。中には，ピアノなどの楽器を習っている児童もあり，音楽の授業に対しても前向きな態度で臨んでいる。リコーダー検定では，自分の課題としている曲に何度も挑戦していた。できないところは積極的に先生に尋ねていたり，できている友達からアドバイスをもらったりするなど，一生懸命に取り組み，最後には，ほとんどの児童が自分の課題をクリアしていた。

2. 授業計画と評価

<評価の観点と評価規準>

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌 唱				
器 楽	○			
創 作				
鑑 賞	○			○

<題材に即した具体的評価規準>

	ア 音楽への関心・意欲・態度	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	金管楽器について関心をもち，音が鳴ったり変わったりするしくみの学習に進んで取り組もうとしている。	金管楽器の音が出るしくみを理解し，金管楽器の特徴を感受しながら，金管楽器の音色を味わって聴いている。
学習活動に即した評価規準	・金管楽器の音が出る方法に関心をもち，鑑賞の学習に自ら取り組もうとする。 ・マウスピースやホースラッパが鳴るように，自ら取り組もうとしている。	・金管楽器の音を自分のイメージから文やオノマトベを使ってワークシートに表現している。 ・音の出るしくみを金管楽器の音のイメージに結び付けて聴いている。

<題材の指導と評価計画>

次(時)	ね ら い	評価	評価の方法
1 次	金管楽器の「仕組み」について考える <おもな学習活動> ・鑑賞 ・ワークシート ・実演（問いかけ） ・楽器体験	エ ア	ワークシート 取り組みの姿勢
2 次	金管楽器の音楽を味わう <おもな学習活動> ・金管五重奏による音楽鑑賞教室 ・楽器当てクイズ ・ワークシート	エ	ワークシート

＜指導の流れ＞

本題材では、〔共通事項〕の課題設定として音楽を形づくっている要素のうちの「音色」に着目して、児童の音色に対する感覚（聴こえ方）の変化をねらいとする。

第1次「金管楽器の仕組み」と「金管楽器の音色」

・DVDの視聴をおこない、金管楽器の演奏を聴かせて、児童に金管楽器の響きや楽器に対するイメージをワークシートに記入させ、何も知らない状態で児童が金管楽器の音をどのようにとらえるのかを把握する。

・金管楽器は、唇を合わせ、息を流すことによって振動を起こし、音が出ることを児童に気づかせる。これは専門用語ではバズイングと言い、金管楽器の演奏の基本となる原理であるが、授業では「唇を震わせる」という表現に留める。金管楽器を演奏する奏者がこのようなことをしていることは、児童にとって、なかなか予想できないことである。このことを全くわからない段階から、教師が実演をおこない、マウスピースと言うパーツのみでのバズイング、唇のみでのバズイング、というふうにして音の実態を少しずつ原理に近づけ、音が出る原理に気づかせる。



マウスピース

・金管楽器は、一つの管の長さで様々な音を鳴らすことができ、それらの倍音に従って音を移動させていることを児童に気づかせる。「トランペットはボタンが3つしかないのにたくさんの音が出るのはなぜだろう？」という問いかけから、この教具を使って、ボタンのないホースラッパを児童に吹かせて考えさせ、金管楽器における倍音というものの理解を深めていく。ここでは、倍音の原理についてまで踏みこまない。



ホースラッパ

第2次「金管楽器の音楽」

・児童に金管五重奏の演奏を聞かせる。今までの授業内容を振り返りながら金管五重奏による演奏を聴かせ、4種類の代表的な楽器をそれぞれ、紹介したり、クイズを出したりして、各楽器の響きや金管アンサンブル全体の響きを味わう。鑑賞後は、金管楽器がどのように聞こえたか、それぞれの金管楽器の特徴はどんなところか、というようなことを中心に児童にワークシートを書かせる。

3. 教具について

今回、体験活動で使用した教具はマウスピースとホースラッパである。それぞれ、授業では、体験活動をペア学習でおこなったため、一学級あたりの児童数の半数の15本を用意した。吹き口を共有するため、児童にはそれぞれ抗菌ウェットティッシュを配り、自分の体験時に使用するよう呼び掛けた。ホースラッパは、じょうご、ビニールホース、マウスピースを連結させて作成した。プラスチックマウスピースを使えば1本あたり1000円程度でできる。今回は、

音の変え方の学習をおこなったので、どのくらいの長さが適しているのか調べるため、様々な長さで試したところ、長すぎると倍音が増えすぎて音の変わり目がわかりにくく、短すぎると倍音間の距離が広すぎて音の移行が難しくなることがわかった。今回は、トランペット用マウスピースを使用し、そのマウスピースに対して、容易に音が変わる1メートル20センチ程度のものを使用した。

4. 授業実践と考察

— 1時間目 —

目標：「金かんがっきの音はどうやったらでるのかな？」

時	活動計画	教師の支援
0		・男子を後ろ、女子を前に六列に並ばせて、ペアの人を確認するために一度、手をつながせる。
5	○金管楽器の音を聴いてみる。	・DVDで金管アンサンブル「茶つみ」を聴かせる。
3	○金管楽器のイメージをワークシートに記入する。	・ワークシート①を配る。
		・今の自分の金管楽器のイメージをワークシート①に記入させる。
2	○本時の課題を知る。	・発表させる。
	金かんがっきの音はどうやったらでるのかな？	・本時の課題を板書する。
10	○金管楽器の音がどのように鳴っているのか考える。	・トランペットを演奏し、デモンストレーションをしながら、楽器の鳴る仕組みを明らかにしていく。
20	○マウスピースを使ってバズィングを体験する。	・児童が発見したことを板書する。
		・マウスピースを配り、二人一組になって挑戦させる。
		・一人当たりの挑戦時間を決め、平等に練習できるようにする。
		※音だしをしていない児童は、挑戦している児童にアドバイスさせる。
		※音の出ない児童には、唇の振動に注目するような助言を促す。
5	○わかったことをワークシートに書く。	・ワークシートを配り、今日の授業を簡単に振り返る。

— ワークシート —

ワークシート①

金かんがっきってどんな音？

どんな音が聞こえてきた？

1つ音 高い・低い 大きい・小さい あつたかい・つめたかい	2つ音 高い・低い 大きい・小さい あつたかい・つめたかい	3つ音 高い・低い 大きい・小さい あつたかい・つめたかい
--	--	--

原かにも「こんがかんじ！」っていうことばが合ったらいいなあ！

3年 組 なまえ

ワークシート②

金かんがっきのしくみ

どうやって音の高さを変えてる？

くちびる	歯のえびさ
音が低く 音の時	音が高く 音の時

どうやって音を出してる？
(くちびるに息を当ててみる！)

どれくらいでできたかな？

☆☆☆

3年 組 なまえ

※1時間目はワークシートの右側（「どうやって音を出してる？」）を用いて学習した。

考察

1 時間目の学習から今度は、児童の学びから発展させてホースラップにつなげた。児童は体験活動の中から自分たちで音が変わるひみつを探ることができた。1 時間目と比較すると児童がより主体的にかかわることができた。また、秘密に関するキーワードが体験活動から出てくることで、より深い思考ができていていると考えられた。また、逆に、授業をしてみて、金管バンド指導におけるホースラップの可能性に気づくことができた。ホースラップで学ぶ倍音間の移動は、児童にとって感得しにくい技術の一つである。授業のために使用したホースラップを、倍音に移る感覚を養うために金管バンドで使用することは非常に効果的指導法であると考えられる。

— 3 時間目 —

本時の目標：「いろいろなしゅるいの金かんがっきのイイところってなんだろう」

時	活動計画	教師の支援
2 2	○前回の振り返り ○演奏者入場	・前回までの学習内容をまとめたものを貼り、学習内容を振り返らせる。 ・演奏者を拍手で迎えさせる。 ・鑑賞のしかたを児童に伝える
3 10	○1 曲目（宇宙戦艦ヤマト）演奏 ○演奏者・楽器紹介	・それぞれの楽器が簡単に演奏して、音を聴かせる。 ・楽器の音を聴いて、それぞれの楽器の音がどんな音に聞こえたか答えさせる。
5 10	○2 曲目（この木なんの木）演奏 ○楽器当てクイズ ・トランペット ・ホルン	・どの楽器がメロディーを吹いているか注意して聴くよう呼びかける。 ・演奏者の前にカーテンをおいて、演奏する。 ・どの楽器の音か手を挙げさせる
8 5	○4 曲目（となりのトトロメドレー）演奏 ○今日の振り返り	・歌詞を貼って、メドレーのなかの「さんば」を演奏にあわせて歌わせる ・今日の振り返りを児童に発表させる

— ワークシート —

ワークシート③

4 しゅるいの金かんがっきのイイところ！

	トランペット	ホルン	トロンボーン	チューバ
音を色でだててみよう 色？	() 色 音色	() 色 音色	() 色 音色	() 色 音色
イイところをさがそう？ (音にちょうちんをつけて さがそう！)				

3 年 組 () なまえ

考察

マウスピースやホースラッパを学習して、アンサンブルを聴いたので音色だけでなく音が出る仕組みや楽器の形にも注目して聴いていた。また、ワークシートも音色や役割、楽器の構造の特徴、音の高低など、いろいろな視点を持って書けていた。演奏中にじっと耳を澄まして聴く様子や楽器紹介のときの楽器を見る目から、児童のいろいろな感覚に対する集中力や興味・関心の高さがうかがえた。

V おわりに

以上、小学校音楽科における鑑賞の学習として、金管楽器の音色と音の出る仕組みに焦点を絞った教材開発と授業実践をもとに、その学習や指導法の在り方と可能性を考察してきた。

その結果、大きく以下の2点について、成果を確認することができた。

第一に、小学校音楽科において金管楽器について学習する際の題材化の試案を提示した。金管楽器の学習については、学習指導要領では特に具体的な記述はないが、教科書では中学年の鑑賞の教材として取り上げられており、本研究でも3学年を対象に教材開発と授業実践を行なった。〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素のひとつとして「音色」に着目し、バズィングやホースラッパを用いて体験的な活動を取り入れて、金管楽器の音の出る仕組みを糸口に、音色のよさや美しさを味わって聴く活動につなげていくことができた。

第二に、松本が島根大学教育学部で1000時間体験として行なってきた松江市立内中原小学校での金管バンドの指導経験をもとに、島根大学大学院教育学研究科では「学校教育実践研究」として、小学校音楽科の授業に金管楽器を題材化することができた。松本自身の専門性を生かした課外活動での音楽の体験活動が、教科としての授業実践への発想を着実に培い、応用できることが示された。

一連の実践の後、2010年12月24日に、附属小学校の指導教員・神門洋子教諭と筆者らで、事後検討会を行なった。神門教諭には、「学校教育実践研究」の実施にあたって、年度当初の計画立案の段階より、継続して指導助言を仰いできた。神門教諭からは、まとめと今後の課題として、次の5つの点について指摘があった。

1. マウスピース、ホースラッパといった児童が素直に興味を示す教材を用いて、「金管楽器の音が出るひみつ」を種明かしするというアイデアで、効果的に児童を惹き付けることができた。
2. 1時間目に児童が実際にマウスピースを吹き、バズィングを体験したことが土台となって、2時間目はより主体的に鑑賞に取り組むことができた。マウスピースによる「音の出る仕組み」を理解した上で、音色の特徴やよさを味わう活動につなげたことは高く評価できる。
3. マウスピースを使ったバズィングの体験では、ペア学習を効果的に取り入れ、身近な友達に教え合ったり、成果を確かめ合ったりしながら、児童が自ら前向きに学習を進めることができた。
4. 前時の学習内容やふりかえりシートの記述等を掲示物にまとめて、学びの成果を共通理解として確かめ合うことができるよう工夫していた。授業を重ねるにつれて、児童の鑑賞への期待が高まってきていることが感じられた。

5. 毎時の「めあて」を、授業の展開のなかで常に意識しておく必要がある。特に、授業の終わりにおける「めあて」の振り返りが、やや弱いように感じた。

以上、神門洋子教諭からは、本研究に対して建設的なご指摘をいただいた。これらの課題を精査し、今後の研究に生かしていきたい。

付記

本稿は、2011年3月13日（日）に山口大学において開催された平成22年度日本音楽教育学会中国・四国地区例会で口頭発表した内容の一部を再構成し、発展させたものである。なお、この口頭発表に際しては、「島根大学大学院学生に対する学会発表等に関する奨学金」の補助を受けた。

謝辞

本研究の実施に際し、島根大学大学院教育学研究科「学校教育実践研究」の附属学校側指導教員としてご指導くださった附属小学校教諭の神門洋子先生、内中原小学校での金管バンド指導を支援してくださった同校教諭の黒田都先生、安部顕先生にお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 1) 小原光一ほか（監修）『小学校の音楽3』教育芸術社，2011.
- 2) 河添達也『小学校音楽鑑賞教材開発プロジェクト 報告書』島根大学教育学部学校音楽鑑賞教材開発プロジェクト，2003.
- 3) 神原雅之『アクション&ビートでつくる音楽鑑賞の授業』明治図書，2007.
- 4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価基準の作成のための参考資料（小学校）』国立教育政策研究所教育課程研究センター，2010.
- 5) 竹内俊一「小学校音楽授業に管楽器を導入するためのストラテジー — 金管楽器の場合 —」『兵庫教育大学研究紀要』第28号，2006（3），pp. 105-109.
- 6) 竹内俊一；平田裕司「小学校音楽授業における管・打楽器指導に関する研究：金管・打楽器を中心として」『兵庫教育大学研究紀要』第30号，2007（2），pp. 161-177.
- 7) 津田正之「音楽科における指導要録改善のポイント」『初等教育資料』平成22年6月号（No861），2010，pp. 23-25.
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社，2008.
- 9) 三善 晃ほか『音楽のおくりもの3』教育出版，2011.
- 10) 湯山 昭ほか『新しい音楽4』東京書籍，2011.
- 11) 「言語活動を充実させる指導と事例」文部科学省ホームページ（2011年1月12日掲載）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/12/1300868_1.pdf（アクセス：2011年3月1日）
- 12) 吉田美代子「音楽科授業における金管バンド活動について」，奈良県ホームページ（2008年3月掲載）

http://www.nara-c.ed.jp/kyousyoku/jirei_2007/05.pdf（アクセス：2011年 3 月 1 日）

【映像資料】

- 13) 熱田庫康；石上則子；粟飯原喜男（企画編集）小原光一（指導）『小学校音楽鑑賞実践指導事例集 3 年生用』エイベックス・マーケティング・コーポレーションズ，2005.